

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



センター研究生やその卒業生が御遠忌において、親鸞聖人の結婚をテーマに演劇を披露する。残すところ四か月、練習にも熱が入る。演劇「親鸞・恵信尼 結婚披露宴 The Shinran Wedding —七五〇年の時を超えて—」4月29日午後4時30分より 於：東別院ホール 入場無料（要整理券）（写真の無断転用はご遠慮ください。）

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・聖典研修 第9・10回
『仏説阿弥陀経』
—その教義と真宗の儀式— ②・③
- ・大谷派の近現代史
。東本願寺と「喇嘛教」 ④・⑤
。日韓仏教交流について
- ・現代社会と真宗教化
孤立する自死遺族—その声を運ぶものは何か— ⑥・⑦
- ・INFORMATION ⑧

◆イラストカット集（※寺報などにご利用ください）

アナタハ、ニンゲンデスカ

私の家に「オレオ」という名のトイブドールがいる。赤ちゃんと来た時に、真っ黒で真ん丸だった、その姿に娘が名付けた。四年が経ち、家族一番の人氣者である。仕事から帰った時、誰よりも真っ先に玄関に走って来て、私を歓迎してくれる。私はオレオの眼を見ながら、今日あったことを報告したり、はたまた愚痴を聞いてもらったりする。そうすると不思議にも肩の力がスッと抜け、いらいらや、くよくよした落ち込みが自然と消える。今では私の一番の理解者なのである。

宗祖は、信巻に

「無慚愧」は名づけて「人」とせず、
名づけて「畜生」とす。
（聖典二五七—二五八頁）

オレオが家に来て間もなく、ベテラン保育士さんから「ままごとの配役を決めるのに、昔は一番人氣がお母さんで、二番人氣がお父さんでした。しかし今、一番人氣はペットです。両親は喧嘩が絶えず、誰もそんな父・母になりたいとは思いません。しかしペットは、家族みんなから愛されています。自分も愛される存在でありたいと、幼いながらに感じているのでしよう」という話を聞いたことが、今になって思い出される。

と『涅槃経』の一句を引用する。人に生まれたから人間なのではない。人に生まれながら、人間であることに傷つき、他者を傷つけることでしか自身の価値を見いだせない生き方を恥じ、自身の存在に傷みを感じる慚愧心。この慚愧がなければ人間ではないと積尊はいわれる。畜生とは犬や猫のことではない。人との交わりを避け、傷みを感じようとしないうちに私こそが畜生なのだ。

オレオは、まばたきひとつせず、伶俐で正直で濁りない瞳をもって私に問いかける。

「アナタハ、ニンゲンデスカ」と。

親が子に向ける愛は、その深さにおいて最たるものである。無償の愛というが、その愛に応えぬ時、その愛が報われぬ時、愛はたちまち変質し憎悪に転ずる。愛憎違順は、対極にあるもの

（主幹 荒山 淳）

聖典研修

『仏説阿弥陀経』—その教義と真宗の儀式—

第九回 二〇一五年七月三〇日（木）

「信心を見失わせるもの」

講師 廣瀬 惺氏（同朋大学特任教授）



真宗に出あっていながら、なぜ惑うのか？

前回、宗教的眞実（本願念仏）に依って生きる在り方が、現実の人間の課題・苦悩から問い返される。信仰は常に危機に瀕せしめられる。『阿弥陀経』は、そういう「難信」を課題とした経典だということを示し上げました。では、なぜ宗教の眞実に依って生きる在り方が、現実の様々な問題の中で危機に瀕していくのか。あるいは、苦しみの状況に直面することにより、宗教の眞実に生きられなくなるのか。

親鸞聖人は「地獄一定」というところで法然上人を縁として念仏にあわれましました。しかしその地獄一定において「ただ念仏」という教えに帰依なさった聖人が、なぜそのことに惑いを抱えていかれたのかという問題です。そのあたりの問題が記されており、その『恵信尼消息』第五通でしよう。

簡単に申しますと、親鸞聖人は四十二歳の時、飢饉の状況において三部経千部読誦を実行され、数日して取り止められ

ました。この出来事は、様々な状況の中でなぜ宗教の眞実を見失っていくのかという問題に対して、身をもって教えてくださっている出来事だといただかれます。

依り所を得た慶び、失う怖れ

聖人にとって特に深刻なのは、第五通の中心に書かれている、五十九歳の時の事柄でしょう。これは聖人が京都にお帰りになる直前ですから、ほぼ『教行信証』が完成している時です。大飢饉の中で聖人は身動きが取れなくなっておられるのです。

『恵信尼消息』には、この時の聖人の状況が「高熱を出され、尋常な頭痛ではなかった」と記されています。これは、単に肉体上の病気ではありません。聖人は念仏に出あっておられた故に、その状況の中で身動きが取れなくなっておられるのです。その現実を受けて、念仏（依って生きるもの）に対する確信を失っておられたということです。

依って生きるもの（依り所）を得たということは救いです。しかし逆に言えば、

その依って生きるものが見失われた時には、自らが生きるということが成り立たなくなる側面を持つていると言えます。宗教の眞実に生きるといふことは、そういう問題を抱えて歩むということでしょう。そういう意味で、宗教の眞実に出あった慶びは同時に、そのことを見失われることへの怖れと裏表なのではないでしょうか。

眞実を見失わせるものとは？

道理としては、困難な状況に出あった時こそ、宗教の眞実に依って生きられるべきなのです。しかし、それを見失ひ生きている者にとっては、『恵信尼消息』第五通は大きな光なのではないでしょうか。

人の執心、自力の心は、よくよく思慮あるべしと思ひなして後は、経読むことは止りぬ。さて、臥して四日と申すあか月、今はさてあらんとは申す也」と仰せられて、やがて汗垂りて、よくならせ給いて候いし也。

（『聖典』六一九頁〜六二〇頁）

恵信尼様は親鸞聖人の言葉として、本願を見失わせるものを、「人の執心、自力の心」とお示しくださっています。「執心」というのは、問題にとらわれることでしょう。例えば死という問題にとらわれ、生死を超えて救おうとしてみてください。根拠を失っていく。そして、その苦しみの状況を何とかしようと、自らを立場とし、自らの力を頼みにしていくとする。執心が自力を立場としていくこ

とによって、人生全体の根拠としていただかれる宗教の眞実を見失っていく。『恵信尼消息』で言いますと、念仏の信心を見失っていくということです。様々なことに出あひながら生きていく、その人生全体を救おうとしている念仏の信心を見失っていく。しかし、親鸞聖人はそこからまた立ち上がっていかれたとおっしゃっているのです。

生涯の問題に応える『阿弥陀経』

そうしますと、「人の執心、自力の心」というのは生涯の問題になっていくわけでしょう。一度決着をつけたから、それで終わりというわけにはいきません。念仏の信心（宗教の眞実に生きる在り方）は、人間の様々な現実問題の中で常に危機に瀕していく。その中で新たに獲得され続けていくような歩み、宗教の眞実に生きる歩みだと申し上げてよろしいのではないのでしょうか。

そういう問題に改めて説かれているのが『阿弥陀経』。これは信心守護の経典であります。そのことは「人の執心、自力の心」という課題に改めて説かれた経典だということです。「執心、自力の心」を克服せしめ続けていってくださる。本願の信心に立ち返り続けさせていってくださる、そして「本願によって、生死を超えて人間としての現実を生きていく」という在り方を回復させていってくださる経典が『阿弥陀経』であると申し上げてよろしいのではないのでしょうか。

第十回 二〇一五年九月十八日 (金)

「仏教儀式の始まり」

講師 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員)



仏さまへの挨拶の仕方

今日は仏教の儀式の始まりについて考えてみたいと思います。仏教は釈尊の僧伽から始まります。その頃は、基本的に儀式と呼べるようなものは、あまり必要無かったと思います。

『仏説無量寿経』に、

尊者阿難、仏の聖旨を承けてすなわち座より起ち、偏えに右の肩を袒ぎ、長跪合掌して仏に白して言さく……

〔聖典〕七頁

とありますが、釈尊のお弟子の阿難尊者が、釈尊に向かって「座より起って右肩を脱ぎ、膝を折って合掌をした」。「五徳現瑞」の部分です。これが釈尊に対する当時の挨拶の仕方です。

また、世自在王仏のもとへ法蔵比丘が訪れた場面でも、その挨拶の様子が次のように表現されています。

世自在王如来の所に詣でて、仏の足を稽首し、右に繞ること三帛して、長跪し合掌して頌をもつて讃じて曰わく……

〔聖典〕十頁

これは、沙門となった法蔵比丘が「嘆仏偈」を称えて世自在王仏を讃嘆する前

の一文です。「稽首仏足」とは、仏さまが少し高い所に座っておられ、ひざまずいてその足を持って頭に付けるということです。これについては、「接足作礼」と表現されることもあります。

『仏説無量寿経』の他にも、経典には、仏さまに会った時の挨拶である「偏袒右肩」と「右繞三帛」、「合掌礼拝」が、一連のものとして表現されています。

仏さまとの出あいの再現

このような挨拶の仕方は、上座部仏教の方々が右肩を出して山吹色の衣を着るといふ形で受け継がれています。また、日本の僧侶が着る五條袈裟や七條袈裟なども同様です。他にも法要中の行道散華において、本尊のまわりを三周することもとも挙げられます。

つまり、釈尊に挨拶をするという在り方が、今の私たちの儀式となったのです。当時の人たちは釈尊の前で挨拶をした後に、座って聞法しました。釈尊がおられた当時、それらは儀式ということではありませんでした。しかし私たちは、その挨拶の仕方や一連の流れを儀式として行っています。私たちはその儀式の中で経典を誦誦したりしていますが、それは儀式を通して、仏さまとの出あいを表現し、聞法する姿を現しているわけです。

私たちは儀式によって、仏さまとの出あいを再現しているのです。仏である釈

尊に出あい、教えをいただいでいく。釈尊の滅後には、亡くなった釈尊に教えを聞くというかたちで儀式を行い、教えをいただいでいく。それが仏教徒としての在り方ですし、仏教の儀式の基本でもあるのです。

仏教の儀式は、仏教独自のものだけで成立していない

仏教を特別視し、仏教に関わる全てのものが仏教独自のものだと考えてしまうことはありませんか？しかし、仏教の儀式は仏教が独自に作り上げたものではなく、釈尊への挨拶の仕方にしても、当時のインドの常識的な挨拶が始まりです。また儀式だけではありません。古い時代に成立したと伝えられる経典には、釈尊以前のインドの思想が、そのまま經典に入り込んだりしています。つまり、インドの他の宗教と同様に、仏教も一つの共通の基盤(当時のインドにおける宗教状況)から生まれ出てきたのです。

釈尊がお生まれになった当時、インドは宗教改革の時代でした。輪廻説が六道輪廻として定着していく中、多くの宗教家が輪廻から自由になること、つまり「解脱」ということを模索していたのです。そして、それまでのバラモン教の正統派とは異なる方向をもって、「沙門」と呼ばれる新しい宗教家が出てきました。仏教も、六師外道と言われる教えと同様に、そういった所から出てきたと考えられています。

もちろん、他の宗教と仏教とは思想的に異なります。輪廻から自由になるといふ点で言えば、六師外道と言われる教えとは、全く異なる方向性を示しています。

す。仏教のいう解脱は、無我、無常を基盤とした「覚り」「涅槃」です。しかし、釈尊が、彼らと共通の問題意識を持っていたということには留意すべきだと思います。

出家は仏教だけのもの？

例えば「出家」もそうです。仏教独自のものではなく、インドの宗教世界のひとつの在り方として「出家」があったのです。仏教がまだ存在しない当時において、釈尊が出家できたのは、そのような共通基盤があったからなのです。

当時の仏教教団の特徴として、「身分に関係なく教団に入れる」「その席次は、入った順番によってのみ決まる」などが挙げられます。この部分だけを見て「仏教は当時のカースト制度を超えた」と言われることがあります。確かに、仏教の教えが、カースト制度を超えるものであることは確かなことだと思います。

しかし、この仏教教団の特徴は、仏教だけのものではないのです。当時のインド社会では、出家者が非常に尊重されていました。そのため、出家教団には、ある程度の自治が認められていたようです。つまり、仏教教団がカースト制度を超えた在り方を選ぶことができたのは、当時のインド社会がそれを認めていたからなのです。このようなことは最近よく言われるようになってきました。「仏教」をよく知ろうと思うならば、仏教が説かれた当時の社会的背景や宗教事情にも、十分注意を払う必要があるのではないかと思います。

九月一日〜三日、御遠忌お待ち受け特別講座「人生講座」において「戦争・平和」を考える三日間」をテーマに行われた連続講座の内、二日間を教化センターの研究業務「大谷派の近現代史」の平和展学習会として行いました。その二つの講義抄録を掲載します。また、ウェブサイトに「お東ネット」に講義録全文を掲載予定です。

初日は、北海道大学の高本康子氏が、明治期の「喇嘛教※」をめぐる「大陸と日本の交流史」について、大谷大学教授をつとめた寺本婉雅の足跡を尋ねました。

大谷派の近現代史
9月1日

東本願寺と「喇嘛教」

— 寺本婉雅の生涯 —

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員

高本 康子氏



《喇嘛教》と寺本婉雅》

皆さんは「喇嘛教」に、どんなイメージをお持ちでしょうか。チベットやモンゴルの地域にある仏教というのが、いわゆる「喇嘛教」です。現代では「チベット仏教」もしくは「モンゴル仏教」と呼びます。

明治期、日本は朝鮮半島に進出し、その後は「満蒙」（満洲と蒙古の地域）へと出ていきます。「満蒙」のむこうにあるのがソビエト連邦でした。ソビエト連邦と戦うためには、その最前線にいるモンゴルの人たちを味方になければならず、彼らが信じている「喇嘛教」に、コンタクトを取ろうとしたのが戦時中の日本の陸軍、外務省、日本仏教でした。記録によると「喇嘛教」に日本人が接触したのは明治からで、その最前線に立ち続けたのが真宗大谷派でした。

今回はその中で、大谷大学の教授にもなり、陸軍や外務省のスパイ・黒幕だと誤解を受けている寺本婉雅を紹介します。

《チベット到達成功》

彼は一八七二年に生まれ、戦争が終わらない一九四〇（昭和十五年）年に亡くなります。最初は一八九八（明治三十二年）に北京へ行きますが、これは本山からお金を貰って行ったのではなく、海東郡大野村（現・愛西市）のお寺の住職である彼の父が私財を擲ってお金を工面しました。翌年にパタンという町に到達し、チベットの領域に日本人として初めて足を踏み入れます。その後一九〇〇年に北京に滞在した時、チベットのお経を手に入れました。一九〇五年、首都ラサに到達し、一九〇九年に帰国します。

彼の有名な業績は、お経を持って帰ってきたこと、ダライ・ラマ十三世に大谷光瑞を紹介したことですが、言い換えれば、この二つだけしか取り上げられていないということです。

《東本願寺とチベット仏教》

日本人が直接「喇嘛教」を見た時、最



『蔵蒙旅日記』巻頭収録写真 右から寺本、慶親王、坂田巖三大佐、醇親王、鄭永邦書記官（北京、1900年撮影か）

初に記録で確認できるのは小栗栖香頂です。彼は明治維新の直後、日本仏教が存亡の危機を迎えていた時に東本願寺から北京に派遣され、北京で最上位のチベット仏教寺院「雍和宮」で勉強しました。その成果が『喇嘛教沿革』という、日本初のチベット仏教に関する概説書です。

その後、東本願寺の中国での布教活動が盛んになり、一旦途絶え、明治二十年代に接触が再開します。この頃、ヨーロッパで仏教の研究が進み、大乘仏教が疑問視され、日本仏教は二度目の危機を迎えます。チベットには、サンスクリット語から

直訳されている経典があるに違いない。その中に日本仏教を救うお経があるはずだと考えた若い日本の仏教者はチベットに

命を懸けて行こうとしました。チベット研究ではそれを「人感熱」と呼びます。寺本婉雅もその一人だったのです。

《寺本の日記》

寺本婉雅について書かれた本は、残された原稿を編集して出版した『蔵蒙旅日記』のみでした。しかし最近、新しい資料が出てきました。彼の遺品です。

まずは大谷大学が預かっている、日記、書簡、書類、チベット語の文章。三年くらいかけて、私もその整理を手伝わせていただいています。

そして、もうひとつ。鎌倉の寺本家にあった資料が、ひよんなことから私の手元にまいりました。日記、書簡、写真などがありますが、一番重要なのは日記です。

《仏教徒として大陸を見つめる》

一九四〇年に亡くなるまでの日記をずっと読みました。彼はスパイでも黒幕でもなく、真面目なお坊さんであったというのが私の感想です。『蔵蒙旅日記』の序文を山口益先生がこう書かれています。「今、アジア大陸を遍歴せられた若き頃の先生の日記が出版されるにあたって、私はかつて先生に抱いていた求道者としての姿に再び会いたい気がするのである」。この求道者というのが、まさしく仏教者としての寺本婉雅の姿だと思えます。海の方こうの大陸を見るひとつの目であり、態度であったと思うのです。

※「喇嘛教」はチベット仏教やモンゴル仏教と呼ばれているが、言葉自体は「喇嘛の教え」という意味であることもあり、当時の言葉として敢えて使用した。

二日目は、曹洞宗雲祥寺住職の一戸彰晃氏が、曹洞宗が過去の戦争協力を反省した「懺謝文」を刻んだ石碑を韓国・群山の東国寺に設置するなどの、日韓仏教交流を記録したドキュメンタリー映像「その日の恨を解くために」懺謝文碑建立」を上映した後、「日韓仏教交流について」をテーマに講演しました。

大谷派の近現代史
9月2日

日韓仏教交流について

曹洞宗雲祥寺住職

一戸 彰晃氏



《日韓の食い違い》

日本人の86%、韓国人の90%が「日韓関係はうまくいっていない」と思っているというリサーチ結果があります。何故でしょうか。例えば、日本軍慰安婦問題とか、強制労働の問題などについて、謝罪を求められています。これを日本人は非常に勘違いしているのです。韓国の慰安婦だったお婆さんたちは何を求めているのか。日本に「金をよこせ」と言っているのではないのです。「心から謝罪をしてもらいたい」と言っているのです。そうすると、日本からは「何回謝れば気が済むのか」となる。すると韓国では「一度だって本当に心から謝ったことがあるのか」となる。そうして食い違っているのです。

《近代の韓国仏教》

韓国には、全日本仏教会のような、仏教界を統合する組織の「韓国仏教宗団協議会」があります。最大宗派の「大韓仏教曹溪宗」をはじめ、「太古宗」「天台宗」などが所属しています。韓国の宗教事情はカトリック、プロテスタント、仏教がそれぞれ40%ぐらいのバランスで信者が

分かれているようです。

韓国の仏教が今のようになつたのは戦後の「解放後」です。李王朝時代には、仏教は弾圧をされてきました。それが、日本に植民地化されるまでずっと続いたのです。

日本の植民地時代が始まった時に、「韓国」の仏教を支配するようになるのです。その有名な法律が「寺刹令」です。「朝鮮総督府」を頂点にその下に三十あるいは三十一の本山を置いて、全部ピラミッド型に支配したのです。

「韓国」の仏教者は喜びました。「日本の仏教って、いいな」「総督府に守ってもらえれば、自分たちの教団も発展するかもしれない」と考えた者もいました。中には「韓国」の仏教者が集団で大谷派に所属させられたこともありました。

ところが、一九四五年に日本が戦争に負けて「韓国」が植民地から解放されました。解放・独立せんとする時に今度は親日狩りが行われたのです。

《解放後の韓国仏教》

「朝鮮戦争」を経て、北に金日成が朝鮮民主主義人民共和国を作り、南ではアメ

リカ政府の傀儡政権である李承晩が韓国（大韓民国）を作ったのです。李承晩がキリスト教信者だったこともあり、ある種の仏教弾圧を行った。私は植民地時代に日本仏教が開教した曹洞宗や大谷派の布教所などの跡を調査しています。全羅南道の港の町、木浦には大きな大谷派の伽藍が残っています。解放後にキリスト教会になり、そして今は博物館にという変遷をしています。

《仏教の社会活動》

現在、韓国の仏教は元気があります。若い人たちが非常に活発です。私は長い間お寺の住職をやっていますが、若い子なんかは来やしないですね。何故そうなのか、皆さんは考えたことはありませんか。日本の仏教が最も社会活動というものを行なったのはいつか。それは戦争の時代です。戦争の時代に日本仏教は一生懸命に社会活動をやりました。そして戦争



韓国仏教宗団協議会が主催するお釈迦様の誕生日を記念して行われる燃灯会の様子

に負けました。そうしたら、「政治に関わらないようにしましょう」というふうになつてしまった。それが今でも繋がっているのではないかと私は思っています。

じゃあどうしたらいいのか。まともに社会活動をやることなのです。韓国では、政府も宗教を尊重しています。日本の国が、宗教を尊重するのは靖国神社ぐらいのもので、首相が行くわけですから。韓国は違います。4月8日のお釈迦様の誕生日を、韓国は国民の祝日になっています。同じようにクリスマスも国民の祝日になっています。

《なぜ宗教が必要か》

懺悔するということは非常に難しいことです。「懺悔したら自分が終わってしまう」と思う。懺悔するということは、謝るといふことです。しかし人間が人間に対して謝ることはできないのです。そこで必要なのが宗教なのです。

私は、妻と喧嘩しても一度も謝ったことがない。色々な理屈をつけて自分を正当化する。その繰り返しです。でも、謝らなければ人間の命は深まらない。

キリスト教でも、イスラム教でも、仏教でも、宗教は懺悔からスタートします。宗教的な絶対者の前に謝ることはできるのです。目の前の人間に「ごめんさい」と謝ることはできません。もし口に出して言ったとしても、腹の中では別のことを考えている。でも絶対者の前だからこそ謝れる。だから宗教なのです。私はそういう意味で、宗教の素晴らしさというのを感じています。日韓関係も、お釈迦様という絶対的な存在を通じた交流が求められていると思います。

現代社会と
真宗教化

孤立する自死遺族

—その声を遮るものは何か—

「千の風の会」代表

木下きのした宏明ひろあきさん

二〇一五年十二月、「第七回いのちの日の時間—自死者追悼法要—」が、宗派を超えた有志僧侶らによって勤められた（本誌八面に報告）。

近年自死者の数は減少傾向にあるが（二〇一四年内閣府調べ）、見過ごされやすい問題として、一人の自死者につき五人程の人が心身に重大な影響を受け、日常生活に支障をきたしているという自死遺族の存在がある。遺族は累積され続けているのである。

教化センターでは、法要に先立って十月に行われたスタッフ学習会に参加し、自死遺族会「千の風の会」の代表である木下宏明さんに自死遺族が抱える問題を伺った。「自死遺族が抱えている現状を多くの人に知ってほしい」との木下さんの厚意により、抄録をここに掲載します。

妻と息子の自死

二〇〇一年四月、私の妻は身体に火をつけ、自ら命を絶ちました。妻は精神的な病を患い、処方された安定剤を過剰摂取して倒れたり、異常な過食や過呼吸に陥っていました。こうした状態が十年ほど続き、とうとう息子との些細な喧嘩をきっかけに自死しました。

精神科に通う家族を抱えていると地域の人々からの偏見を感じます。精神的な病は見た目にはなんともないように見えても、本人は非常に苦しんでいます。例えばリストカットも一般的には愚かな行為だと馬鹿にされたりします。ともに生活していると分かるのですが、本人の苦しさは他人にはなかなか伝わりにくいのです。息子は妻が自死してから何度か不登校

始業式の日、つまり母親が自死をした日を選んで家から失踪し、土岐の山奥で遺体として発見されました。

命を粗末にしたわけじゃない

妻と息子の自死を通し、精神的な病理に対する地域の根強い偏見や、自死の内実がなかなか理解されないという問題に直面しました。

妻が亡くなった時も非常にショックでしたが、その時は「一人息子を守らなければ」と踏ん張ることができました。しかしその子に死なれると、いろんなことが頭に浮かんで居ても立ってもいられない状態になりました。そういうとても苦しいもぬけの殻の状態が続きました。そこへ周囲から「親の資格がない」と批判され、身を投げようかと呷へ行くほど追い詰められました。自責の念は当事者が一番感じているのです。しかし遺族からはなかなか反論できない。

自死した妻や息子の行為について「命を粗末にした」という言葉を耳にすると、妻や息子の全生涯を否定されたように感じるので。それに対して身近にいた私は「決して命を粗末にしたくて自死したわけじゃない。自分の尊厳を守ろうとした選択だった。苦しみを受け止めて懸命に生きようとしたんだ」と肯定したい。しかし行為の選択として自死をしたという動かしがたい現実と、それを防げなかつた負い目によって、遺族は返す言葉が失うのです。その結果、誰にも悩みを言えなくなり、苦しみや悲しみ、憤りを自分の中に抑え込んで孤立していくのです。

封印された死

自死には、三つの要因があると思います。自分自身の内面の問題、家庭環境や学校などの自分を取り巻く状況の問題、そして貧困や就職難などの社会的な問題です。その個人と集団と体制という三つの要因が複雑に絡みあって自死が起こっていると思います。単純に自己責任でもなく、また世の中が全て悪いというわけでもない。どれか一つに原因を置くと、遺族はそのレッテルによって排除され、孤立していくのです。

ある社会学の専門家が自死を「封印された死」と表現しました。遺族は、身内の自死とそれに伴う苦しみを地域の日常生活の中でなかなか打ち明けられないからです。妻が亡くなった時は「身勝手な死」「現実逃避」、子どもの時には「もつと強い子だったら良かったのに」などと言われました。私は強い子だと思っています。病気の母親に寄り添い、その後も自責の念を抱えながらも元気に生きようとして踏ん張ってきた子です。それが弱い子のように言われてしまう。

それから「地域の恥」という感覚を受けました。実は私たちが住んでいた家は、前の住人も自死されており、次に住んだ妻が自死をし、その後さらに息子まで自死しましたので、呪われた家だと言われました。

そういう社会の偏見から、自死という身内の死因を周りに隠される遺族がおられます。自死への偏見やステイグマがまだまだ地域に浸透している現実や、家庭内での自死へのとらえ方や受け入れ方の

違いから歪みが生まれる場合もあります。さらに遺族一家が親類からお付き合い自体を拒否されることもあり。身近な人から疎外され、様々な悲しみや苦しみが新たに生まれる。ですから自死というのは、一般の病気で亡くなった場合と違い、すんなりと悲しみや喪失感に浸るといことが難しいということを感じます。

一人に向き合ってほしい

自死の話はどうしても暗くて重い話題です。妻の話をする「あなたも辛いだろうからその話はやめよう」と言われ、「もっと前向きに生きなよ」「次にもっと良い人があらわれるよ」と励まされます。言う側に悪気はないのですが、そんなに単純に亡くなった人のことを整理しきれないのです。ある程度は日常を保つために整理はしているのですが、ぎりぎりのところで整理しきれない。しかし、遺族はそういった悪気はないけれど少し無責任な言葉を受けて、できるだけ笑顔で過ごそうと努めます。

かといってヘラヘラ笑うことはできません。地域では自死遺族としての「ふるまい」をしないと何を言われるかわからないからです。誰でも笑いたい時もある。ば、笑顔になれない時、穏やかにない日もあるわけですから、もし皆さんがお話を聴いてくださる機会があるなら、丁寧に向き合ってほしいと思います。

遺族会ではそれぞれの抱えている気持ちを大事にしています。「笑顔であってほしい」「笑顔でなければならぬ」といった主観的な健全さを個々人に当てはめて

はいないか、「遺族とはこういうもので、こういう悩みを抱えている」といった型にはまった見方や接し方をしていないか、私自身も近頃戒めています。

遺族は元気でいてはいけないのでしょうか。遺族会には様々な思いを整理し、新たな出会いをして結婚している方もいます。そういう遺族がいてもいいですよ。喜ばしいことなので。

九月の「自殺予防週間」や三月の「自殺対策強化月間」には、自殺防止の呼びかけが巷に広がります。この際のスローガンが遺族を傷つける場合があります。「自殺防止！命を大切に！」といった呼びかけが、自死で亡くなった人を否定しているように感じるので。スローガンの主旨はとも大切なことだと思っておりますが、必ずしも亡くなった人の尊厳が守られていない場合がある。「命を粗末にしないように」という言葉を理解しながらも、



自死遺族は増え続ける

辛い思いを抱えてしまう。自死の罪深さや戒めを、みなさんのような宗教者の方も語りますが、それが相手にとつてどのような意味ではたらくのか。教義が大切だということはおわかりませんが、型どりに当てはめるのではなく、一人ひとりの状況に向き合って言葉をかけてほしいと願います。

「自殺対策基本法」が二〇〇六年六月

成立、十月に施行されました。ここ二、三年、自死者の数は全国的に減ってきています。しかし自死遺族は減らないのです。年単位の自死者数は微減傾向にありますが、自死者一人に対して五、六人といわれる深刻な影響を受ける近親者の数は、毎年累積されています。苦しみを抱えたまま誰にも気に留めてもらえない遺族、結婚記念日や命日などの大切な日に動揺し不安定になってしまふ遺族の具体的な一人ひとりが、身近にどんどん増えているという事実を知ってほしいと思います。

私が遺族会を作った時に「当事者だけ集まっても、どうせ傷の舐め合いになるだけだろう」と言われました。しかし傷の舐め合いは容易ではないのです。舐め合うためには、どこでどのように傷つき、深さはどれくらいなのかということまで分らないとできません。そして自分の傷も晒さなければなりません。そうでなければ一方的に相手を舐めるだけになります。

遺族会では、まず一人ひとりの違いを大事にする必要があると思っています。

当事者だけでなく、関わり合うみんなが信頼し合い、安心できる場所づくり、関係づくりを「千の風の会」ではともに考え、ともに作りたいと願っています。

最後に、今日お話したことは私の思いや考えであり、全ての自死遺族の方々には当てはまるわけではありません。本当にお一人お一人、その心情や心の運び、抱えている状況なども違います。それだけにその個別性や多様性を念頭に置きながら、真摯に関わっていただけると嬉しいのです。

- (i) Drug overdose, ODと略す。
薬物の過剰摂取、過量服薬。
- (ii) 他者や社会集団によって個人に押し付けられた負の表象、烙印。ネガティブな意味のレッテル。

取材を終えて

この世には「私に気づいてほしい」というたったそれだけの、心の奥底からの SOS が満ち溢れている。しかしその声を聴くこと、人と人が「遭遇」ことは有り難い。私はその叫びを聴こうとしていたのか。聴いた気になって、どれだけの人を傷つけてきたのか。現代社会が抱える「生きづらさ」「不安」「孤立」を生み出しているのは私自身ではなかったかと突き付けられた。

私たちが目指している、ともなる社会は、木下さんが話されたように、人と生まれた傷みを互いにさらけ出し、舐め合うような、決して綺麗ごとではすまない対話の先にあるのではないだろうか。私たちはお寺をどのような場にしたのか。そこに浄土が荘厳されている意味を見つめ直したい。(研究員 大河内真慈)

現代社会と真宗教化 報告
自死者追悼法要

「第7回 いのちの日 いのちの時間」

2015年12月4日 曹洞宗白鳥山法持寺

教化センターでは、現代社会が抱える自死(自殺)の問題と真宗教化の接点として、自死遺族に超宗派で向き合う「いのちに向き合う宗教者の会」の活動の後援を通し、支援の具体的な在り方を探求し、報告を重ねてきた。突然の死別体験に伴う激しい悲嘆状態にある方々が安心して亡き人を偲ぶことができる場を開きたいという願いのもとに勤められてきた自死者追悼法要。今年第7回を迎え、曹洞宗の白鳥山法持寺(熱田区)にて執り行われた。

超宗派であることから、法要の次第は毎年異なり、参拝者の声をたよりに、どのようにすれば遺族が抱える普段封印している様々な感情と自身が向き合う“場”となるのかということをも最優先に作り上げている。その過程に、儀式作法の一つ一つに込められた願いや、現代社会において宗教儀式的持つ役割をうかがい知ることができる。

当日は40名弱の参拝者が訪れ、法要後はお茶をいただきながら、

日頃の思いや法要で感じたことを僧侶を含めた複数の班に分かれてゆくりと語り合った。

アンケートには、「故人に向き合うことができた」「懐かしい気持ちになった」「故人を愛おしく感じる」「お経の意味も知りなくなった」「悲しい気持ちになった」といった声が寄せられた。木下宏明氏(6・7面)は「直接顔を見、声を聞き、何に反応するかを感じてもらえることが嬉しい」と語られる。悲しみの場で人と人が丁寧に向き合うことで生まれる温かさを感じ、あらためて弔いの意味を考えさせられた法要であった。(職員 曾場 浩代)



亡き人への想いをつづったメッセージを真言宗僧侶がお焚き上げした。

INFORMATION

教化センター日報
■2015年9月～11月

- 9月4日 研究生・実習「真宗門徒講座(書いて味わう「正信偈」⑤)」
14日 研究業務「平和展」学習会
16日 研究生・学習会「真宗本廟一日参拝 事前学習」
18日 教化研修「聖典研修⑩」(竹橋太氏)
24日 研究業務「平和展」学習会
29日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
10月2日 研究生・実習「真宗本廟一日参拝」
8日 研究業務「平和展」学習会

- 9日 研究生・実習「真宗門徒講座(書いて味わう「正信偈」⑥)」
19日 研究業務「平和展」学習会
22日 研究業務「自死者追悼法要」事前学習会(木下宏明氏)
26日 研究生・教化研修「2015年度 伝道スタッフ養成講座①」
29日 教化研修「聖典研修⑪」(廣瀬惺氏)
11月4日 研究業務「平和展」学習会
5日 研究生・実習「真宗門徒講座(書いて味わう「正信偈」⑦)」
13日 教化研修「聖典研修⑫」(竹橋太氏)
16日 研究生・教化研修「2015年度 伝道スタッフ養成講座②」
18日 研究業務「自死者追悼法要 いのちの日いのちの時間」リハーサル後援
27日 研究業務「平和展」学習会

お知らせ

●事務休暇について

- ・冬期休暇：2015年12月29日(火)～2016年1月6日(水)
- ・午後5時閉館：2015年12月28日(月)、2016年1月7日(木)
- ・臨時閉館(図書整理のため)：2016年1月23日(土)・30日(土)

●図書整理のため貸出を停止させていただきます：2016年1月18日(月)～30日(土)

- ※上記期間中は、教化センターの蔵書、視聴覚教材及び資料の整理のため、貸出を停止させていただきます。閲覧のみ可能です。
- ・ご返却のお願い 返却期限：1月16日(土)
お手元に借り受け中の書籍及び視聴覚教材がございましたら1月16日(土)までにご返却ください。

第27回平和展
「けされた親鸞聖人」

■とき■

2016年4月22日(金)～5月1日(日)

■ところ■

東別院会館 2階「蓮」「橘」の間

- ◆第27回平和展は御遠忌期間中に東別院会館で行います。春のお彼岸中は行いませんのでご注意ください。

公開講座のご案内

◆聖典研修『仏説阿弥陀経』—その教義と真宗の儀式—

- | | | | |
|-----|------------|-----|--------------------|
| 第5回 | 1月21日(木)…① | 講師 | ①廣瀬 惺氏(同朋大学特任教授) |
| 第6回 | 2月19日(金)…② | | ②竹橋 太氏(儀式指導研究所研究員) |
| 第7回 | 3月17日(木)…① | 会場 | 名古屋教務所1階 議事堂 |
| 第8回 | 6月16日(木)…① | 持ち物 | 『真宗聖典』 |
- ※各回とも午後6時～8時30分 聴講料 500円 ※教師陞補のための聴講証発行研修

《編集子雑感》

名古屋教区・名古屋別院の御遠忌法要まで半年を切った。しかし、個人的には実感があるような、ないような…という不思議な感覚が未だに続いている。

そんな中、教化センター研究生たちによる演劇企画「親鸞・恵信尼結婚披露宴」が動き出し、毎週のように自主的に集まって台本作りや練習に励んでいる。練習風景を直接この目で見ただけではないが、その熱心さは言動

の端々から伝わってくる。今回の御遠忌でひとつの足跡を残そうとしている研究生たちの姿は羨ましくもあり、頼もしくもあり、そして、少しだけ妬ましくもある。

あ。もしかして、未だに実感がなような不思議な感覚を抱えているのは、この熱意が自分自身に欠けていたからなのかな…と、半年を切った今更ながらに研究生たちの後ろ姿から教えられたような気がした。(て)

◆大きな印刷物にご利用ください◆

ポスターや看板用の大判・長尺プリントができるプリンターを新調しました。印刷コストも下がり、よりご利用いただきやすくなっております。ご利用希望の場合は事前にお問い合わせください。



■教化センター

〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00
土曜日 10:00～13:00
(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)
〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間
～お気軽にご来館ください～

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ【お東ネット】<http://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

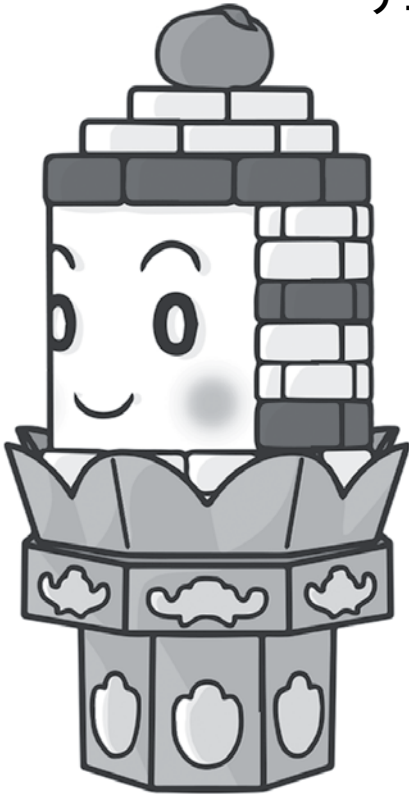
お東ネット

検索

ナゴヤごえんきキャラクター

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



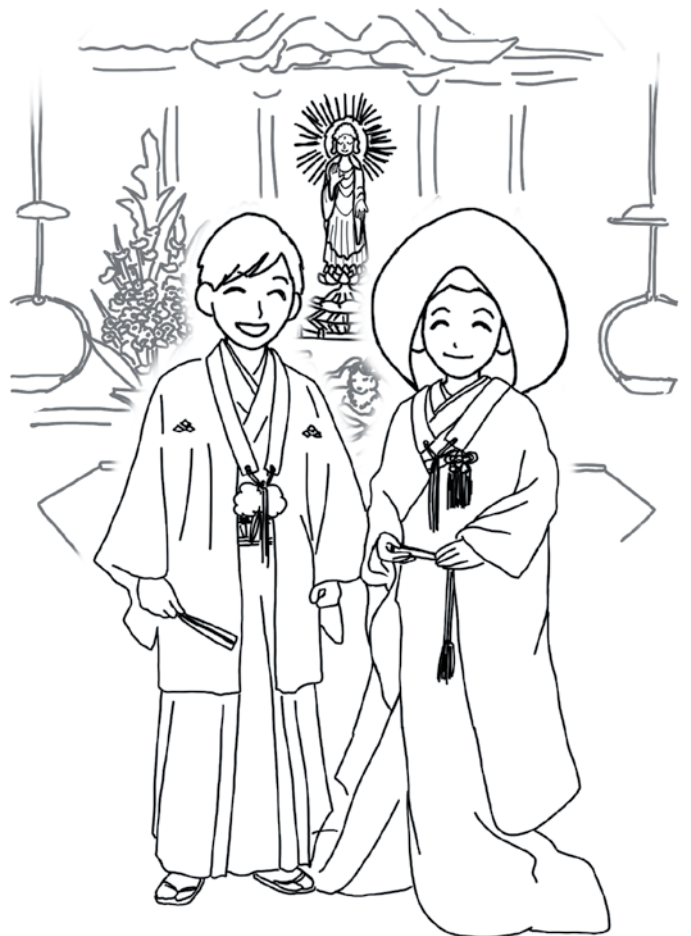
オケゾックン



蓮ちゃん



ちづる
千鶴ちゃん



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。